DESK Zentrum für Deutschland- und Europastudien, Universität Tokyo, Komaba
東京大学ドイツ・ヨーロッパ研究センター
Center for German and European Studies

DESK Activity Reports シリーズ第 4 号
2025 年 5 月

第 40 回春のインターウニに参加して

森　雄摩

・概要

インターウニ・ゼミナール(以下インターウニ)とは、ドイツ語圏に興味を持つ学生・社会人が、語学力を向上させるとともに、実際にドイツ語を用いて議論・プレゼンテーションをすることを目的とした合宿ゼミである。1978 年に当時東大教養学部ドイツ科の教員だった辻理氏によって提唱されて以来春・夏にほぼ毎年開催され、震災やコロナ禍での中断を挟みつつも今回で春のインターウニは 40 回目を迎えた。夏のインターウニは一定のドイツ語力を前提に議論・発表することに重点が置かれているのに対し、春のインターウニはドイツ語の学習にも比重が置かれている。

今回参加した第 40 回春のインターウニは 2025 年 3 月 7 日から 11 日の 4 泊 5 日の日程で、山梨県山中湖湖畔の平和荘という施設にて行われ、日本各地から学生が 50 名超、日本人・ネイティブ併せて講師が 16 名、そのほかドイツ人留学生が 9 名参加した。学生は大学生の学部生が大半だったが、大学院生や社会人、高校生も少なくなく、学生の男女比はおよそ 1 対 2 程度と女性の参加者の方が多かった。ドイツ語の学習歴も趣味として独学で勉強している人から長期の滞在経験がある人までおり多様だった。講師は主に大学でドイツ語を教えている方々からなり、企画・運営まで担ってくださっていた。今回の主幹は獨協大学教員の相澤啓一氏が担当された。

今回の全体テーマ「世界の未来と私たち―これからの数十年 Zukunftfenster: Ein Blick in die nächsten Jahrzehnte」のもと、日程の前半が語学力別に 6 つに分けられたグループでの講師によるドイツ語の授業、後半が興味関心により 8 つに分けられたグループでの最終日のプレゼンテーションに向けた準備という構成になっていた。授業は途中休憩も挟みつつ 1 回 3 時間程度のものが計 5 回あった。加えて DAAD やゲーテ・インスティテュートで勤務する方からの所属組織についての紹介の時間も設けられた。また、ジャーナリストとして日本・ドイツで活動している Marei Mentlein 氏をゲストとして迎えて日本語・ドイツ語を交えてのディスカッションも行われた。政治や社会、異文化交流などの大きな話題について、参加者が日常的に考えていることを話し合った。

ほかに、夜には Kneipe として学生や講師の別なくお酒も交えつつ歓談する場が用意され

ており、さらに最終夜である 4 日目の夕食後には Schlussfeier として早押しクイズや椅子取りゲーム、Topfschlage といったミニゲーム、音楽やダンスなどの出し物が披露された。

合宿での活動に加え、ドイツ大使館からインターウニ参加者への招待があり、3 月 24 日に希望者で大使館を訪問した。文化担当参事官の Soehnke Grothusen 文化課長がドイツ大使館の活動や外交官の仕事について説明してくださった。なお、大使館は 4 月より開催される大阪万博に向けた PR を行っており、館内にはドイツパビリオンの模型が飾られていた。大使館の外塀にもパビリオンのコンセプトを紹介する装飾が張り出されていたが、それはつい先日完成したばかりだったという(大使館は日本国内での広報活動にも力を入れているようで、万博に関する取り組みも大使館の運営する各種 SNS で紹介されている)。

・活動詳細

前述の通り日程の前半は主に授業に充てられていた。そこではドイツ語での意見交換の練習が中心で、講義形式ではなく円形に座って双方向に発信することを重視するものだった。クラスは初日に自己紹介形式での学生同士のやり取りを講師や留学生らが判定する、という方法で決定された。私が振り分けられたのは 6 つ中上から 3 つ目のクラスだったが、そこではテーマに沿わせつつニュース記事や歌詞、AI 生成の画像をもとに意見交換をし、そこから数人ごとに意見をまとめていってクラス内で発表する、というのが大まかな流れだった。他のクラスでも概ね同様だったようだが、一番上のクラスでは相澤氏指導のもと日本語ドイツ語の同時通訳の演習も行われたという。授業時間は 3 時間と、普段の授業と数字だけを比べるととても長いものだったが、終始和やかな雰囲気で進み、扱う素材も親しみやすく、また共同作業の時間もとられていたことから全体的に退屈しないものだった。

最終日のプレゼンテーションに向けたグループは、事前に提出した自らの興味についての簡単な作文をもとに、政治、移民、環境、育児・労働、ルッキズム、人文学、AI、未来の生活という 8 つのテーマに分けられ、このうち私は政治のグループに割り振られた。7 人からなるグループのメンバーの関心からプレゼンのテーマは 2025 年 2 月に実施されたドイツ連邦議会選挙という時事的なものとなり、CDU の勝利や AfD の躍進とその背景、今後の展望について検討、発表した。1 グループにつき 10 分弱の時間が割り振られており、1 人 1 分弱程度の発言に加え、パワーポイントや寸劇も用いられていた。それぞれのグループには日本語の堪能なドイツ人留学生がついてサポートしたこともあり、最終日の発表ではどのグループでもメンバーそれぞれが精いっぱいできる範囲で貢献しているようだった。

・所感

今回のインターウニに参加した主な目的としてドイツ語での議論、コミュニケーション能力の向上を挙げていた。集中的な学習とはいえ短期間で語学力が劇的に変化したとは言えないものの、現在の自分にとって足りないものと今後の指針は改めて確認できたように思う。学術的な文献の読解によるドイツ語の普段の学習も大事ではあるが、会話能力の点で見れば、触れるドイツ語はまずは比較的平易なもの、そして専門的な単語よりも日常の場面でより使うものが好ましいかもしれない。また、当然ながら聴解力に一層重点を割かなければならないだろう。

語学面以上に私にとって収穫だったのは、ドイツ語の多様な学習背景をもった人々と関わることができたことだった。インターウニには様々な所属の学生、社会人が参加していたが、彼ら彼女らの共通項は「ドイツ語を学んでいる」ということくらいであり、その関心、研究分野もまた多岐に広がっていた。一言にドイツといっても、その関わり方は実に多様なあり方があるのだということを再認識できた。普段は教養学部のドイツ研究コースという小規模なコミュニティのなかで活動することが多く、そこでは、授業や卒論に向けた普段の学習としていわゆる人文科学のドイツの過去の文献を対象に扱うことが多い。私はまだこれから卒論に本格的に取り組む学部生であり、まずは今後の自分の研究の基盤を構築するためにドイツに関するものについてもある程度範囲を絞って接していかざるを得ないかもしれないが、インターウニで出会った人々が教えてくれた、自分とは異なったドイツへの興味の持ち方、関わり方へつねに自らを開いていたいと思う。

ところで、参加してみて驚いたのは、女性の参加者の方が圧倒的に多いことだった。度々内外から疑問視される通り、東大は少なくとも学部では男女比が約 4：1 と圧倒的に男性の比率が高く、また理由はさておき新入生の第二外国語選択に際して近年ドイツ語は女性学生からの人気があまり高くない印象があるため、女性の方が多数を占める環境でのドイツ語の学習は私にとってかなり珍しいことだった。期間中折に触れて講師の方にそのことを伝えたら、インターウニは例年男性より女性の参加者が多いとのことであり、またそのことに意外性を感じている人はいないようだったことも驚きだった。女性の参加者の方が多い理由として、総じて女性の方が語学に熱心に取り組む傾向があるようだとのことだった。もしその傾向が現実に存在していることだとして、何故そうなるのか私にとってはとても疑問であり、インターウニでも他の参加者とこの件について意見交換をすることもあった。不

平等であるか、解消すべき問題であるか、は別にしても、語学の領域にまでジェンダーバイアスが存在するのなら残念なことだろう。なにはともあれ、性別に関しても東大とは異なるドイツ語の学習環境を垣間見ることができた。

やや横道に逸れたが、続いては語学の勉強合宿というインターウニの形式について所感を述べる。夏のインターウニとは趣旨を別にして、春のインターウニでは合宿の「寝食を共にして数日間過ごすことで他人との距離が縮まる」という特性を活用して、参加者が楽しみながらドイツ語を学習することに趣向を凝らしているようだった。AI の発展などで語学の重要性は今後減っていくのかもしれないが、語学を「たとえ苦痛でも必要だからやる」のではなく「楽しいから努力する」ものだと思わせることは、継続的に学習する上で非常に意味のあることなのではないか、さらに、義務からではなく自発的に身につけることは、「新たな発見を求めて外国圏の人たち、文化に自らを開いていく」という語学の積極的な目的にとって重要なことなのではないだろうか、と今回思いを新たにすることができた。普段の学習とは違う環境でドイツ語に触れ、勉強する意味を見つめなおす機会を提供するためにも、合宿という形式は有意義なものであり、だからこそ長年継続されてきたのだろう。

最後になるが、改めて、大使館訪問まで含めた今回の一連のイベントによって、ドイツ語を通じて新たに多くの人と出会い、親睦を深めることができたことはとても幸運なことだった。日常的に関わり合う人たち以外にもより多くのドイツ語学習者と交流の輪を広げたいというのはかねてからの私のささやかな望みだったため、今回築けた交友関係を今後も大事にしていきたいと考えている。

末筆ながら、インターウニ実行委員、参加者や留学生の皆様、今回のインターウニを通じて多くの刺激を与えてくださった全ての方々に感謝を述べてこの報告を終わりとさせていただく。

（2025 年 5 月 9 日受理、2025 年 5 月 30 日公開　※DESK-Miszellen 編集委員会記入）